

特別記事

Report

取材・文＝中東生
Text＝Shinobu Naka

日本の俊英が大活躍！ 第76回ジュネーヴ国際音楽コンクール（作曲・ピアノ部門）

毎年さまざまな部門で開催される「ジュネーヴ国際音楽コンクール」。昨年はチェロ部門で上野通明が日本人初優勝を飾ったことでも話題になった。2022年は作曲部門とピアノ部門の開催（23年はフルートとカルテット部門）。ここでは入賞者のコメントと合わせて、コンクール会場からの演奏レポートをお届けする。

作曲部門第2位…中橋祐紀
バッハに着想を得た声楽曲

2022年10月下旬～11月3日にジュネーヴで行われた第76回ジュネーヴ国際音楽コンクールでは日本人が健闘した。2年ごとに開催される作曲部門の今年の課題は15～20分の6声の音楽アンサンブル作品で、97人の応募作品の中から中橋祐紀ほか二人が選ばれ、10月26日ジュネーヴ音楽院フランチ・リストホールでのファイナルでは、ノイエ・ヴォーカルゾリステン・シュトゥットガルトにより世界初演された。中橋の《セッティングス (Settings)》は、第2位と「若い聴衆賞」「大学生聴衆賞」「Nicati-De Luzet 財団賞」を獲得した。J・S・バッハのカンタータに着想を得た作品だというが、宗教を超えた人間の根底を感じさせる音楽は、歌えた歌手たちも喜びを伝えるにきたほだだ。

受賞翌日のインタビューでは「この1週間が夢のようです。作曲家として、異国の街で発表するのも初めてで、リハールから演奏会まですべてがすばらしく、また、ほかのファイナリストとの交流も貴重な体験でした。彼らは人間的に

The 77th Concours de Genève



1939年の創設以降、アルトゥーロ・ベネデッティ・ミケランジェリ、ゲオルク・ショルティ、フリードリヒ・グルダ、マルタ・アルゲリッチなど、世界で活躍するアーティストを輩出している「ジュネーヴ国際音楽コンクール」 ©Anne-Laure Lechat

●作曲部門

【入賞者】

第1位: Shin Kim (27歳、韓国)
第2位: 中橋祐紀 (27歳、日本)
第3位: Árpád Cserevák (27歳、ハンガリー)

●ピアノ部門

【入賞者】

第1位: Kevin Chen (17歳、カナダ)
第2位: Sergey Belyavsky (28歳、ロシア)
第3位: 五十嵐薫子 (28歳、日本)、
Zijian Wei (24歳、中国)



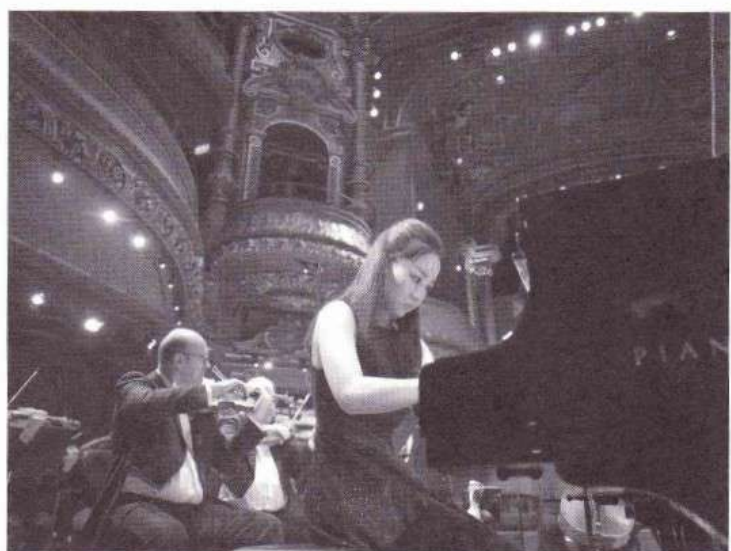
*出場者たちの演奏、インタビューなどは公式 YouTube チャンネルでみることができ

も、音楽的にも尊敬できて、『この二人と比べてもしようがない、このまま順位をつけないで帰してくれたらいいのになあ』と運命を呪うほどでした。最初のリハールでは響きがデッドな環境だったので、失敗作かと思ったけれど、リストホールでは思ったように響いてくれました。強弱以外注文をつけるところはない彼らの声に乗ると、想像以上の出来栄でした。今回は課題が音楽アンサンブルだから応募したのですが、それは、この分野が開拓されていないと感じるからです。自分の作風は響きが繊細なので、声を扱う作品はそういう自分の個性が生きてほしい、いまでも音楽曲に関心の重点を置いていました。審査委員長は『宗教的な重いテキストとほかのテキストのバランスが難点だったかも』と2位の理



コンクール後のインタビューにて（筆者撮影）

◆中橋祐紀 Yuki Nakahashi
第76回ジュネーブ国際音楽コンクール作曲部門で、6人の声楽アンサンブルのための《セッティングス》で第2位ならびに3つの特別賞を受賞。富山県出身。東京藝術大学、同大学院で学ぶ。松本清、久行敏彦、野平一郎、ステファノ・ジェルバゾーニの各氏に師事。学部卒業時にアカンサス音楽賞、買上作品賞を受賞（首席）。第88回日本音楽コンクール第3位、第10回JFC作曲賞を受賞。現在パリ国立高等音楽院作曲科第一課程に在籍。



ファイナルではプロコフィエフ「ピアノ協奏曲第3番」を演奏 ©Anne-Laure Lechat

◆五十嵐薫子 Kaoruko Igarashi
第76回ジュネーブ国際音楽コンクールピアノ部門で第3位受賞。東京都出身。桐朋学園女子高等学校音楽科、桐朋学園大学、同大学院修士課程を修了。2021年の第18回ショパン国際ピアノコンクール本大会に出場。2015年の第84回日本音楽コンクール第3位、三宅賞を受賞。第89回日本音楽コンクールでは、ピアノ伴奏で審査員特別賞を受賞。今泉紀子、山田富士子、村上弦一郎、横山幸雄、岡本美智子の各氏に師事。

由を説明してくれました」と語った。

切磋琢磨し過ぎてした

日本のセミファイナリストたち

ピアノ部門は2022年4月のビデオ予選で182人中40人が選ばれ、9月のオンライン・リサイタルを経て、27日からのソロ・リサイタルと室内楽、アーティスト・プロジェクトの3プログラムで選考されるセミファイナルに9人が進んだ。日本人は進藤美優と五十嵐薫子が残った。

進藤美優のショパン「ピアノ・ソナタ第3番」は好きな気持ち伝わる演奏、ベートーヴェン「ピアノ・ソナタ第24番（テレゼ）」は輝きより音の質を優

先し、スクリャーピン「ピアノ・ソナタ第2番」は凄まじい迫力のフォルテと美しいピアノ・シモ、そして猛進するスピード感と大きなスケールを聴かせ、リストの《ドン・ジョヴァンニの回想》はそれぞれの役柄の歌声が聞こえてきそうな表現力とめまいを覚えるほどの臨場感で興奮を誘った。

反対に五十嵐薫子はシューベルトの歌曲（リスト編曲）から4曲《水の上で歌う》で歌への愛情を、《君は我が想い》では憧れを、《糸を紡ぐグレートヒエン》では恋する苦悩を歌い続け、《魔王》では鳥肌を立てた。しかし歌への想いだけでは足りないかと思っていると、一転してベートーヴェン「ピアノ・ソナタ第29番

《ハンマークラヴィア》では完全な静寂と集中力で弾き切り、客席を沸かせた。二人はリハーサルも聴き合い、助言を与え合ったりして過ごしたという。

ピアノ部門第3位・五十嵐薫子 歌心あふれる演奏で魅了

ウィクトリアホールでのファイナルに進んだ五十嵐は、プロコフィエフ「ピアノ協奏曲第3番」でまた違った顔を見せた。はじめは印象が薄かったが、安定した彼女のピアノにどんどん吸い込まれていく。室内乐的なアプローチでマルゼナ・デアクン率いるスイス・ロマン管弦楽団のなかに溶け込み、抜群なタイミングを掴んでいく。細い体を丸ごと使って

大きい音を鳴らすダイナミックスは意外だ。幻想的な音も印象的で、スリリングに終わった第1楽章、運命的に終わった第2楽章、そしてどんなリズムでもオーケストラを引っ張って、歌心を存分に発揮し、輝かしく第3楽章を弾き終えた。

第3位とロースマリー・ユクナン財団賞を受賞した後、インタビューではそのときの様子を次のように語った。

「審査委員長からは『演奏もいい。ステージ姿もエレガントなのが君の特徴。僕が君の歳の頃はそれだけ弾けなかった』などと言っていたとき、《ハンマークラヴィア》に関する細かい指示が書かれたメールをもらったりしました。審査員だった児玉桃さんには『いい面を持っている。3位だったのは、強いて言えば、内に籠る感じで、外に出せるタイプのほうが、こういう場では強いのかも』と分析していただきました。ピアノを通して、皆が抱えている苦しいこと、嬉しいことなどとも共鳴し、解放され、癒され、感動させて、生きるエネルギーを与えたい」という、可憐ななかにある強さが彼女の魅力だ。足の裏や地面の硬さを意識して、その感覚を指にも取り入れるのだという。それが、お尻が浮くような浮遊感と地に根が生えたような安定感を両立させる秘訣となっているのだろう。幸い日本では引き続きそんな彼女の演奏を聴くことができる。例えば2023年5月1日東京オペラシティでのリスト「ピアノ協奏曲第1番」（共演：角田鋼亮指揮、東京フィルハーモニー交響楽団）に期待したい。